

CHOSHI (第15話)

令和4年7月11日。ひたちなか市民球場。夏の暑さ、ブラスバンドの演奏、応援団の太鼓。チアガール。夏の大会が戻ってきた。1ヵ月前、ベンチの中は雑然としていた。しかし、今日は一人一人の道具が小分けにされていた。チームの役割分担も出来てきているようだ。試合前のシートノック。選手達はきびきびとした動きを見せ、1ヵ月前のおどおど感はなくなっていた。

初回の攻撃。1番の川口(兄)がいきなりヒットで出塁。得点には結びつかなかったが『打てる』という雰囲気チームに与えた。1回裏、川口(弟)のピッチング。ランナーを出す打たせてとるピッチングを徹底し、後続をダブルプレーに打ち取った。序盤3回は0-0。

4回、5回下館工業は清真のエラーからチャンスを広げ、2点をとった。川口(弟)が崩れそうになると、すかさず川口(兄)がマウンドに駆け寄った。すると、川口(弟)は冷静さを取り戻し、打たせてとるピッチングに徹した。

6回表、清真は2番武衛のヒットからチャンスを作った。4番川口(弟)のフォアボールで2アウト1・3塁。ここで5番の安藤は痛烈なヒットを放った。さらに、1・3塁からダブルスチールで川口(弟)が本塁を陥れ、2-2の同点となった。終盤の8~9回は川口(弟)にとって未知の領域だ。しかし、川口(兄)が相手のサインを読み、盗塁を刺したり、ライトの安藤がファインプレーをするなど、守備に助けられ追加点を許さなかった。

終盤川口(兄)は配球を変え、スライダーを有効に使った。スライダーはベース前でワンバンドすることがあるが、川口(兄)は完璧にとった。まるで弟の球は見なくても捕れるぐらいの感じだった。清真の粘り強い守備で、試合は延長に入った。

10回表、清真は2アウト1・2塁のチャンスを作ったが、いい当たりが正面をついて点数はとれなかった。直後の10回裏、川口はフォアボールを出してしまい、ノーアウト1・2塁のピンチになる。そして136球目、バント処理にミスが出て、清真はサヨナラ負けになった。

試合後、泣き崩れる川口(弟)の横で、涙を見せない川口(兄)がいた。ベンチを出ると、川口君のお母さんに会った。『お爺ちゃん(藤本さん)が翔平はよくやったと言っていました。』と教えてくれた。そして『颯大は最後までお兄ちゃんに助けてもらって。』とつぶやいた。確かにこの試合だけを見れば、そう感じるかもしれない。しかし、私は4年前を思い出した。

もし、私がああ場所に戻れたらこう伝えたい。『川口、清真で野球を続けろ。じきに最高のチームメイトがお前の前に現れる。』兄弟最初で最後の高校野球の競演は、引退する3年生6人と共に、忘れられない思い出を作った。